大浪池の伝説

この地域の伝説によると、大昔のこと、村長と村長夫人は山の麓に暮らしていました。裕福な 2 人でしたが、何よりも望んでいたことが一つありました。子供を授かることです。

夫婦は何年も願い、望み、祈り続け、ついに美しい女の子の赤ちゃんに恵まれました。彼らは赤ん坊を「お浪」と名付けます。両親に可愛がられたお浪は、優しく穏やかな子に育ちました。そして彼女は日に日に、より上品に美しくなっていました。成人したお浪は、あちこちから結婚の申し込みを受けますようになります。しかし、両親が結婚の話題を持ち出すと、彼女は悲しそうに微笑むばかり。

ある晩、霧島の森に明るい月光が差しこむと、お浪は突然、「山に行きたい」と言い出します。

彼女の父は思いとどまるよう懇願しましたが、お浪は言い張ります。そこで、彼は彼女にお供することになりました。2 人は木々の間をさまよひ、ついにある池に到着しました。それを見るやいなや、お浪の目が輝きます。そして彼女は掴まれていた父の手を突然振り切り、池に飛び込みました。青黒い池のさざ波が消えると、森は静まり返りました。この時、お浪が戻ってこないことに気がついたとたん、父は悲しみで気が狂い、彼女の名前を呼びます。

彼は池のほとりを行ったり来たりしましたが、どれだけ探しても、お浪の姿を見ることは二度とありませんでした。

お浪が実は池の竜王の化身だとわかったのは、後になってからのことです。村長夫妻が子を渴望していると聞いて可哀想に思い、せめて少しの間でも願いを叶えてやろうと、夫婦の子供に化けていたのです。

そしてこの日から、この池は大浪池として知られるようになります。